

蒼き狼 地果て海尽きるまで

2007(平成19)年3月11日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督＝澤井信一郎／原作＝森村誠一『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗(上下)』(ハルキ文庫刊)／出演＝反町隆史／菊川怜／若村麻由美／袴田吉彦／Ara／松山ケンイチ／平山祐介／野村祐人／保阪尚希／松方弘樹／唐渡亮／榎木孝明／津川雅彦(松竹配給／2007年日本映画／136分)

……井上靖の『蒼き狼』や現在日経新聞連載中の堺屋太一の『世界を創った男—チンギス・ハーン』を読みつつ、大いなる期待感を持って観たが、やはり違和感が……。反町隆史も、30億円をかけた騎馬隊の戦闘シーンも悪くはないのだが、あまりにわかりやすいチンギス・ハーンの物語が私には不満。だって、ホントはこんなに単純な物語ではないはずだから……。『父子の確執』というテーマもよく描かれているが、その視点や悲しみ方が日本的なところが不自然……。もっとも、2時間でチンギス・ハーンのすべてを理解したいという人には、お薦めかも……？

第5章

『敦煌』と『蒼き狼』は私のロマン……

私が過去に観たすべての日本映画のベストワンに挙げているのが『砂の器』(74年)だが、第2位は西田敏行主演の『敦煌』(88年)。私が中3、高1の頃に読んだ井上靖の『敦煌』は、私の中国やシルクロードへのロマンをかき立ててくれた小説で、2001年8月に現実に西安・敦煌旅行に行った時の感激は今でも強く印象に残っているもの。

そんな井上靖の小説でもう1つ強く印象に残っているのが、『敦煌』と同じく中3か高1の頃に読んだ『蒼き狼』。それまで名前は聞いていても、全然イメージがつかめなかったテムジンやチンギス・ハーンの間像がこの小説を読むことによって明確になり、血湧き肉躍りながら読みふけたことをよく覚えている。

そんな井上靖の原作と比べて、この映画は……？

原作は森村誠一版……

この映画の原作は1964年の井上靖版ではなく、2005年の森村誠一の『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗（上下）』。私は森村版を読んでいないが、パンフレットによるとこれは、角川春樹がチンギス・ハーン映画を製作することを前提として、森村氏に『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗』の執筆を依頼したことによって完成したとのこと。もちろん、それを2時間の映画にまとめるにあたっては、中島丈博と丸山昇一の脚本が不可欠だが、この映画が基本的に森村版原作によっているのは当然。

そこで、私の予断と偏見によると、森村版の第1のテーマは父と子の確執、そして男の子を産んだあの時代のモンゴルの女たちが背負っている運命。それはそれでよく描かれているのだが、それはテムジン、チンギス・ハーン物語の1つの側面にすぎず、彼の果たした歴史的な役割や意義そしてその功罪を真正面から描いてほしかったというのが私の正直な気持。また、この映画が最もアピールしたかったのは、モンゴルの大草原そのものであり、視覚的なハイライトシーンとしてはチンギス・ハーンの即位式。そしてそれは、角川氏からの執筆依頼を受け、映画の視覚効果を意識しながら森村氏が執筆したはず。そこで、今回この映画を観たあなたには、是非井上靖版を読み比べてもらいたいものが……。

堺屋太一の連載小説は……？

『失樂園』『愛ルケ』という名作を生んだ日経新聞朝刊の連載小説は、現在堺屋太一の『世界を創った男—チンギス・ハン』。ちなみに、渡辺淳一は現在日経新聞から産経新聞に移り、『あじさい日記』で例によって不倫小説(?)を執筆中……。

この堺屋太一版のスタートは、テムジンとジャムカとの出会いから始まったが、堺屋氏らしく、人名・部族名の整理表をつけたり、地図を多用したり、原史料である元朝秘話などを紹介しながら、彼の視点でチンギス・ハーン像を創出しているが、最初の頃は私でもかなりとっつきにくかったもの。それは何よりも人名と

部族名そして位置関係がわかりにくい……。すなわち、テムジンとチンギス・ハーンの物語を理解するためには、人間関係と地図を傍に置き、常にそれを参照しながら読み進めなければダメということだ。そしてえらいもので、それをずっと続けていると、今やっとこの連載小説の面白さがわかり、かつての『失楽園』や『愛ルケ』と同様、朝1番に読むのがこの連載小説になっているほど……。

どうしても違和感が……

この映画は日本人俳優の日本語によるチンギス・ハーン劇だから、モンゴル人も日本人も最初から違和感があるのは当然。そのことは、角川春樹氏自身にとっても最大の不安点だったことは、パンフレットを読めば明らか。しかし、モンゴルの首都ウランバートルで1月20日に行われたワールドプレミアでは、その不安は完全に解消され、すばらしい拍手に包まれたということだが、さてそれは……？

後半はさすがに少し馴れてきたものの、導入部では「ああ、やっぱりあかんワ」というのが私の率直な印象……。日常の言葉はそれほどでもないのだが、兵士を鼓舞するための「興国の一戦はこの戦いにあり！」というフレーズとか、ハイライトの即位式での「ご照覧あれ！」などのセリフはどう見ても不自然……。

ちなみに、パンフレットによれば、即位式で大切なシャーマン役となる津川雅彦は、「これを日本語でどのように言えば『祈り』と『尊厳さ』を出せるかが非常に難しく悩みました。そこで神式の祝詞と昭和天皇の話し方を参考に、自分なりにとり入れて演じてみました」とのことだから、不自然なのはむしろ当然……？

あまりにもわかりやすい、のが不満……？

日本人は誰にでもよくわかる勸善懲悪モノが大好きだから、遠山の金さんや水戸黄門をはじめ、定番モノのドラマがくり返しテレビや映画で製作されている。ところが、フランス・イタリアを代表とするヨーロッパの映画は、小難しくヒネったものが多い……？ そして、テムジンやチンギス・ハーンの生涯を描く小説や映画になると、そもそもその理解が難しいのが当たり前。だって、日本人は中

国史すらよく知らないのだから、今から800年前に誕生したモンゴル帝国については、その位置や広さそしてその成り立ちやその後の発展についてはほとんど知らないはず。日本人がよく知っているのは、1274年の文永の役と1281年の弘安の役という蒙古襲来だけといっても過言ではないはず……。

この映画では、最低限必要な地図や部族名が映画の冒頭に登場する。しかし、堺屋太一の連載小説を読んでも、その整理と理解がとにかく大変。ところがこの映画を観ると、多くの観客は、テムジンの戦いの流れがよく理解できるはず。それはなぜ？ それは、あまりにもストーリーを単純化し、観客にわかりやすくしているため……？

モンゴルの覇権をめぐるモンゴル部族のテムジンとジャダラン氏族のジャムカ（平山祐介）、そしてケレイト部族のトオリル・カン（松方弘樹）らの戦いは、こんな単純なものではなかったはず……？

ホエルンの悲しい運命は……？

この映画の主演はもちろんテムジンとチンギス・ハーンを演ずる反町隆史だが、父子の確執というテーマにおいては、ホエルン（若村麻由美）とボルテ（菊川怜）という2人の女性が大きな役割を果たすのは当然。

映画冒頭に登場するのは、メルキト部族のイエケ・チレド（唐渡亮）の妻ホエルンを、モンゴル部族であるテムジンの父親イエスゲイ・バートル（保阪尚希）が略奪するシーン。夫イエケ・チレドは、ホエルンに対して必ず連れ戻すと約束してその場を逃げたが、結局彼はその約束を果たすことはなかった。そして、ホエルンはイエスゲイ・バートルの妻としてテムジンを産み、さらにハサル（袴田吉彦）などたくさんの弟を産むことに……。イエスゲイはテムジンをモンゴルの「蒼き狼」として育てたが、ひょっとしてテムジンは……？

ボルテの悲しい運命は……？

他方、オンギラト部族のデイ・セチェン（榎本孝明）のもとを父イエスゲイと共に嫁取りの旅で訪れた14歳となったテムジン（池松壮亮）が、運命的に出会ったのがボルテ。ちなみに、このボルテの幼なじみがジャムカだ。テムジンは、こ

ここでボルテを嫁に迎えると決めたいえ、ジャムカと生涯にわたって友情を守る“^{アング}按達の誓い”を結ぶことに……。しかし、タートル族によって父イエスゲイが毒殺された後、テムジン一家は苦しくなり、ある日愛妻ボルテをメルキト部族のイエケ・チレドに奪われるという悲劇に……。

テムジンは10カ月後、トオリルとジャムカと組んでメルキト部族を滅ぼし、やっとボルテをその手に取り戻したが、その時彼女は妊娠し臨月を迎えていた……。そんな中で生まれてきた男の子を、テムジンが「メルキトの子は生かしておけない」として殺そうとしたのはある意味当然……。ホエルンの説得によってやっとそれは思い止まったが、その男の子につけられた名は、「よそ者」を意味するジュチ（松山ケンイチ）。そこで大問題となるのは、さてジュチはメルキトの子、それともモンゴルの子……？

女兵士クランは掘り出しモノ……？

テムジンはその時代には珍しく「側室」が少なかったが、それでも本妻ボルテの他第二夫人のクランや第三夫人のイエスイらがいたのは歴史上の事実……。そんな側室の1人クランを演ずる Ara は、1990年生まれの韓国人の現役女子高生だから、女を捨てた兵士という役はちょっときつすぎるはずだが、映画用にはきわめてグッドな素材。テムジンとクランとの出会い、クランの兵士への取り立て、そして女を戦利品ではなく人間として取扱うテムジンに惹かれるクランの女心とそれに応えるテムジンという2人の関係はきわめてわかりやすく、この映画の一種の清涼剤だが、こんな小柄で華奢なクランが、ホントに兵士として戦闘で役に立つの……？

『アレキサンダー』 vs. 『蒼き狼』、200億円 vs. 30億円

この映画には5千人のモンゴル軍兵士をエキストラとして動員させた戦闘スペクタクルシーンが登場するが、そこで思い出すのが、オリバー・ストーン監督の『アレキサンダー』（04年）。『蒼き狼』の製作費30億円も邦画としては破格だが、『アレキサンダー』は何と200億円というからすごい。

『蒼き狼』の戦闘シーンは、前半の①ボルテを奪い返すためのトオリルとジャ

ムカの力に頼ってのメルキト部族の討伐戦、②力をつけたテムジンがトオリルと連合を組んでの父の敵、祖父の敵であるタタール族討伐、を経て、後半の③テムジン軍 vs. ジャムカ軍の戦い、それに続く④敗れたジャムカ軍とトオリル連合軍 vs. テムジン軍の戦いという2大戦闘スペクタクルシーンが登場する。モンゴルの草原を大規模な騎馬隊が駆けめぐるとこの戦闘シーンはたしかに見モノだが、『アレキサンダー』における①ガウガメラの戦い、②インド象との戦いという2大戦闘スペクタクルシーンと同様、あまりその戦略的・戦術的位置づけや作戦がわからず、ただ両軍が真正面からぶつかり合うだけだから、両者ともその面白みはイマイチ……？（『シネマルーム7』25頁参照）

父子の別れは感動的……？

私は反町隆史の演技は結構好きで、NHK大河ドラマ『利家とまつ 加賀百万石物語』でやった信長役はピッタリだったし、『男たちの大和／YAMATO』（05年）での森脇二等兵曹役も十分決まっていたと思っている。そして、この『蒼き狼』のテムジン役も悪くはないのだが、やはり青年期から壮年期がピッタリで、即位式におけるチンギス・ハーンは年齢的にももっと老けていてほしいし、体格的にももっと中年太り風になってもらいたいもの……？

したがって、あえていつも過酷な任務を与えていた長子ジュチを北方での戦いで失ったチンギス・ハーンが悲嘆の涙に暮れるシーンは、年が一回りしか違わない反町隆史と松山ケンイチが父子役で熱演しているだけに、やはり違和感が……。また、この別れのシーンのセリフも雰囲気もかなり日本的だったから、モンゴル式の悲しみ方とはかなり違うのでは……？

パンフレットの中で角川春樹は、「50代の女性は『息子のジュチが亡くなるシーンが印象的』と、涙ながらに感激」と紹介しているが、それはリップサービスでは……？

『キネマ旬報』の評価は……？

『蒼き狼 地果て海尽きるまで』について、『キネマ旬報』3月下旬特別号における映画評論家4氏の評価を見ると、1人だけ3点であとの3人はみんな1点。

30億円もかけた大作なのに結構ほろくそに書かれているのは意外だったが、各人の意見にはごもっともな点が多いので、是非参考に……。

角川春樹の野望と挑戦は……？

角川春樹の能力とバイタリティのものすごさはここであらためて紹介するまでもないが、彼が『男たちの大和／YAMATO』に続いて製作したのがこの映画。

この映画の第1の売りは、4カ月にわたるオール・モンゴルロケ。これはCG全盛時代にあえてホンモノにこだわって、モンゴルの壮大な自然と草原をスクリーン上に示すため。

そして第2の売りは、①構想27年、②製作費30億円、③モンゴル軍兵士5千人を動員した激しい戦闘シーン、④エキストラ2万7千人を動員した即位式という、日本映画には珍しい圧倒的な物量戦。もっとも、5億円をかけてつくった原寸大の戦艦大和のセットは、上映終了後尾道に展示されたためかなりの製作費を回収できたはずだが、今回の映画では、すべて気前よくパッと使ってしまったため、再利用できるものはないはず……？

私が行った日曜日の午後7時からの上映では、意外なことに観客席はガラガラ。さて、こんな状態で30億円の回収はもちろん、『男たちの大和／YAMATO』があげた興行収入50億円を上回る興行収入をあげることができるのだろうか……？

2007(平成19)年3月12日記